

論 文

重症心身障害児・者における探索行動に関する研究動向

－探索行動を促す係わりに焦点を当てて－

永瀬 開

Kai NAGASE

大石由起子

Yukiko OISHI

藤田 久美

Kumi FUJITA

重症心身障害児・者の教育を考える上で探索行動は、他者とのコミュニケーションのきっかけとなる行動であるとともに、重症心身障害児・者自身の世界を広げる行動でもある。本稿では、重症心身障害児・者の探索行動を促す係わりに焦点を当て、先行研究の動向を整理した。その結果、探索行動を促す係わりについては、対象児・者の探索行動に対して抱くポジティブな情動を促す係わりと、対象児・者が探索行動に対して抱くネガティブな情動を低減させる係わりが重要であることが明らかになった。

キーワード：重症心身障害、探索行動、ポジティブ情動の促進、ネガティブ情動の低減

1. はじめに

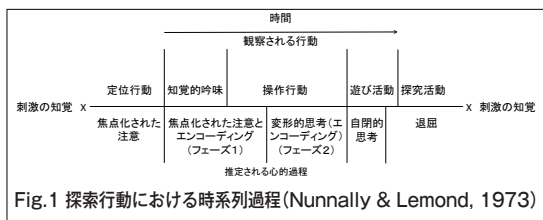
近年、我が国における新生児医療や救命救急医療の技術進歩により、これまでの医療では救うことができなかった多くの命が救われるようになった（平元，2015）。しかしながら、こうした現状に伴い、重症心身障害児・者が増加の一途にある（松葉佐，2015；野崎・川住，2012）。重症心身障害とは、重度の知的障害と重度の肢体不自由の重複障害を指す障害として定義づけられている（大江・川住，2014）。このような重度かつ重複した障害を持つ、重症心身障害児・者に対してどのように教育的支援を行うかということは、特別支援教育における重要な課題の1つである。

重症心身障害児・者における最も重要な教育目標として、環境との相互交渉の促進が挙げられる（岡澤・川住，2005）。ここでの環境とは、大きく分けて2種類に大別できる（鹿取，2003）。1

つは、個人の周囲を取り巻く地理的環境や空間関係、あるいはそれらの大きさや色、形などの物理的刺激や、匂いなどの化学的刺激である物理・化学的環境である。もう1つは、家庭や学校など様々な社会集団におけるやりとりやコミュニケーションの対象となる人的環境を指す社会的環境である。そして、個人と物理化学的環境との関係は「対もの関係」、社会的環境との関係は「対ひと関係」と呼ばれ、「対もの関係」と「対ひと関係」とは相互に関連し合いながら拡大していると考えられている。このような重症心身障害児・者における環境との相互作用の促進を考える際に、探索行動という視点から考えることが有用であるということが指摘されてきた（松田，2002；笹原・川住，2011a）。そこで次章では、探索行動の定義について述べた後、その発達の意義について述べる。

II. 探索行動の定義と発達の意義

探索行動とは、新奇性、複雑性、あるいは変化性のある事物、事象、空間に対し、定位、身体的接近、操作等の行動によって、外界を知覚し、認知していく一連の情報収集行動を指す（笹原・川住, 2011a）。この定義を踏まえると、人と環境との相互作用は探索行動を基に行われるといえる。Nunnally & Lemond (1973) は、探索行動を一連の行動の連鎖と捉え、その行動の過程をFig. 1のように示した。Fig. 1で示したモデルによれば、人の探索行動は、刺激を知覚した後に、対象の定位行動、知覚的吟味、操作行動、遊び活動、探求活動という一連の過程を経て展開するとされる。また、その一連の過程の背後には、焦点化された注意、エンコーディング、変形的思考、自閉的思考、退屈といった心的過程が推定されている。こうした一連の過程を経て行われる探索行動の発達の意義として、以下の3点があると考えられる。



1つめは運動的側面における発達の意義である。上述の探索行動における時系列過程をもとに考えると、探索行動は定位行動を含む刺激に対して接近するといった粗大運動を促す。また、探索行動は操作行動や遊び活動を含む、刺激を手指によって操作するといった微細運動を行うことも促す（笹原・川住, 2007；2011a；2011b）。これらの行動を繰り返す中で、子どもの粗大運動や微細運動の発現回数は増加し、その運動自体も巧みなものとなると考えられる。このことをふまえると、探索行動は、子どもにおけるこれらの粗大運動や微細運動といった様々な運動的側面の発達を促すという意義があると考えられる。

2つめは認知的側面における発達の意義である。上述したように探索行動における時系列的過程の

背後には、焦点化された注意、エンコーディング、変形的思考、自閉的思考、退屈といった心的過程が伴っていると想定されている。そのため、探索行動はこれらの心的過程を経る際に必要とされる注意、記憶、概念形成などの認知的側面の発達を促すと考えられる。このことに関連して、山崎 (1975) は、触知探索行動の実施と図形認知との関連について幼児を対象とした実験的検討を行った。ここでの触知探索行動とは物体を触ることによって行われる探索行動である。実験の結果、図形認知課題の成績が良好だった対象児はその図形に対する触知探索行動を頻繁に行うことが明らかになった。これらのことから、確かに探索行動は子どもの認知的側面の発達を促すということがいえるだろう。

3つめは社会情緒的側面における発達の意義である。探索行動は、乳児が一人で試行錯誤をしながら行うものではなく、大人が提示した刺激に対して探索行動を行う、または大人が探索行動を行う様子を模倣するといったように、大人との共同で行うものであることが指摘されている（北島, 2006）。このような大人との共同活動によって、乳児は他者の動きを模倣することや、他者と対象を共有する共同注意、他者と情動を共有する情動共有、さらに事物を介したやりとりを行うと考えられる（北島, 2006）。こうした点をふまえると、探索行動を他者と行うことによって、子どもの社会情緒的側面の発達が促されることが考えられる。

このように、探索行動は人の様々な側面における初期の発達を支える重要な行動であり、それらを促すような係わりが、重症心身障害児・者と係わる支援者には求められる。しかしながら、重症心身障害児・者においては、彼・彼女らの有する重度の肢体不自由と重度の知的障害ゆえに、探索行動を促すことが非常に困難であることが指摘されてきた（笹原・川住, 2011）。次章では、重症心身障害児・者の探索行動を促すために支援者はどのように係わる必要があるのか、先行研究を概観する。

Ⅲ. 重症心身障害児・者の探索行動を促すために 行われる係わり

これまで重症心身障害児・者の探索行動を促すために行われてきた多くの実践研究において、彼・彼女らの情動状態を踏まえた係わりの重要性が指摘されてきた。なぜなら探索行動を行う重症心身障害児・者は、新奇な刺激に対する興味や関心、さらに、探索行動を行うことそれ自体の楽しみや喜びといったポジティブな情動を経験する一方で、未知の刺激に対して探索をすることに對する緊張や不安といったネガティブな情動も経験する。そのため、ポジティブとネガティブの相反する情動にうまく対処することが、探索行動を行う際には求められる。このことをふまえると、重症心身障害児・者と係わる支援者は、ポジティブな情動を促す係わりと、ネガティブな情動を低減させる係わりを行う必要がある。以下、この2つの係わりについて、実践研究においてその重要性が指摘されてきたものをまとめる。なお、それぞれの事例における重症心身障害児・者を対象児・者、係わりの実践を行う者を支援者と表記する。

1. 探索行動に対するポジティブな情動を促す係わり

探索行動に対するポジティブな情動を促す係わりとしては、主に3つの係わりの重要性が指摘されている。

まず1つめとして、対象児・者が興味関心を持つ刺激を見極め、その刺激に対する探索行動を促すことが挙げられる。笹原・川住(2011b)は、知的障害と肢体不自由を伴うRett症候群¹者の女性との係わりについて報告した。その係わりの中で、支援者は、複数の刺激(ぬいぐるみ、スイッチ玩具、ままごと用玩具、ブロック等)を提示し、対象者が明らかな接近行動を示したブロックに焦点を当てて係わりを行った。その結果、係わ

りの当初はブロックに対してわずかに触れる程度であった探索行動が、係わりを続けていく中でブロックを押し倒す、ブロックを積み重ねたタワーに体当たりをするといったよりダイナミックな探索行動へと展開したことが明らかになった。こうした係わりの実施と対象者の探索行動の展開の関係から、対象者の興味関心のある刺激を適切にアセスメントし、その刺激に対する探索行動を促すことが対象者の自発的な探索行動につながると考えられた。

またこうした興味関心のある刺激の見極めは、より日常的な生活場面における探索行動についても重要な視点である。岡澤・川住(2005)は、ある重症心身障害児における食事行動²の改変過程について事例検討を行った。この事例において対象児は、食事行動に対してしばしばネガティブな行動をとることが多かった。こうした行動を示す対象児に対して、支援者は複数の食べ物を提示し、対象児がより長く注視した食べ物に対する食事行動を促した。その結果、食べ物に対する接近行動の増加や食事行動に対するネガティブな行動の減少などの食事行動の変容が見られるようになった。この係わりにおいて見られた食べ物に対する注視は、対象児の興味関心を反映していると考えられ、この事例も支援者が対象児の刺激に対する興味関心をアセスメントすることの重要性を示していると考えられる。こうした食事場面における食物に対する注視の重要性は菊池・郷右近・室田・野口・平野(2004)においても指摘されている。これらの事例は探索行動の促進のみをねらった個別の係わりを行う際においてだけではなく、日常生活の中でも重症心身障害児・者の興味関心に配慮することの重要性を示している。

2つめとして、探索行動における知覚的吟味や操作行動を行った際に、反応性の高い刺激を用いることが挙げられる(北原・米山, 1995; 笹原・

1 Rett症候群とは、その多くが遺伝子変異に起因し、知的・運動発達の退行、目的的な手の使用機能の低下、手のみみ合わせや叩き合わせる常同運動を特徴的な徴候とする、女児に多く出現する症候群である(三浦・熊谷・鈴木・大木・松本・宮崎・早川・孫田・山田・若松, 2005)。

2 食事行動も食べ物に対する定位、接近行動、操作行動を含むことから、1つの探索行動だと捉えることができる。

川住, 2011a)。笹原・川住 (2011a) は, Rett症候群者の女性を対象とした実践において, ミュージックチェーンビーズスイッチ (i WANT社製) を用いた係わりを報告した。ミュージックチェーンビーズスイッチは, 数十本のビーズチェーンがカーテン状にぶら下がった玩具であり, ビーズが玩具に取り付けられている金属のバーに触れると, 内臓のミュージックボックスから一定時間音楽が流れる仕組みになっている。この係わりの中で対象者は, ミュージックチェーンビーズスイッチに対する働きかけが, 次第に音楽を鳴らそうとするものへと明確化していったことを報告している。笹原・川住 (2011a) は対象者のこの行動の変容の要因として, 反応性の高い刺激を用いたことによって, 探索行動における成功体験が保障され, 探索行動に対する動機付けが維持されたことを指摘している。重症心身障害児・者においては, その障害特性のために, 探索行動を行った際に刺激からのフィードバックを受けることが困難な場合がある。そのため, 探索行動を行う際に, 対象児・者が刺激からのフィードバックを十分に受けることができるような反応性の高い刺激を用いることが重要であると考えられる。

3つめとして, 探索行動へのポジティブな情動を促すコミュニケーションが挙げられる。このようなコミュニケーションのあり方として, 多くの実践研究において叙述的コミュニケーション (Declarative Communication) の実践が報告されている。叙述的コミュニケーションとは, 他者と考えや思いを共有する目的で行われるコミュニケーションであり (土谷, 2016; 中村・岡澤・土谷, 2016)。多くの実践において, 対象児・者が探索行動を行う際に, 探索対象の刺激の反応について叙述する声かけや, 対象児・者の探索行動を賞賛する声かけが行われていた (笹原, 2010a; 笹原・川住, 2010; 笹原・川住, 2011b; 川住・南島・野崎, 2015; 鶴田・岡澤, 2015)。こうした声かけがなされた際には, 対象児・者の探索行動がさらに促進されたことが報告されている。中村ら (2016) は, 叙述的コミュニケーションにつ

いて, コミュニケーションを行う二者間の興味という心的状態に作用する特徴があることを指摘している。そのため, 支援者が叙述的コミュニケーションを行うことによって, 対象児・者が探索行動を行う刺激に対して, その興味が増加されることが考えられる。

ここまで, 重症心身障害児・者が探索行動に対して抱くポジティブな情動を促す3つの係わりについて述べた。続いて探索行動に対するネガティブな情動を低減させる係わりについて述べる。

2. 探索行動に対するネガティブな情動を低減させる係わり

探索行動に対するネガティブな情動を低減させる係わりとしても, 主に3つの係わりの重要性が指摘されている。

まず1つめが, 重度・重複障害児・者が探索行動を行う際の環境調整である。笹原・川住 (2010) は, Rett症候群者の女性を対象とした係わりにおいて, 対象者が接近行動を示したブロック玩具等の配置の意味について考察を行った。この事例における対象者は, 係わりの当初, ブロックをはじめとする玩具に対して注視する様子が見られる一方で, 手を伸ばす行動などは見られず, 支援者が対象者の手を取って, 玩具に触れさせようとすると対象児は身体を固くして緊張状態を示す様子を見せていた。こうした様子を受けて, 支援者は, 対象者が発現しやすい前進や上体の前傾といった粗大な運動によって探索行動を行うことができるよう, ブロック玩具を組み立てて置くといった, 前進や上体の前傾によってブロック玩具に触れ, 変化を生じさせることができるような環境に調整した。このような環境の調整を行うことによって, 対象者のブロック玩具に対する全身の粗大な運動によって探索を行う様子が少しずつ増加したことが報告された。この事例において探索行動が増加した背景として, 適切な環境調整によって, ネガティブな情動が低減されたことがあると考えられる。この事例でも見られたように慣れない動作によって探索行動を行うことは, 緊張などのネガティブな情動を伴うことが考えられる。

そのため、対象者が行うことが容易な動作によって、探索行動を行うことができるように、支援者が環境調整を行うことが重要である。

また、こうした環境調整は、探索行動の対象となる刺激の配置だけでなく、探索行動に対する適切なガイドによっても行われる。笹原・川住(2009)は、25歳の男性を対象とした痰の吸引³の際の係わりについて報告した。痰の吸引は、痰の除去という快の側面を有している一方、チューブという遺物が身体内に挿入されるという不快な側面も有している。係わりの当初、対象者はチューブが挿入される際に困惑した様子を示していた。こうした様子を受けて、支援者は対象者がチューブの挿入を把握しやすいように、チューブを挿入するまでの10秒程度の間に、声かけと口元やのどに軽く触れるという触覚系のサインを提示した。こうしたサインの提示を継続して行ったところ、対象者の困惑の様子が見られなくなるとともに、サイン自体に対しても笑顔を見せるようになった。このように環境の変化を対象者に対して伝えることも探索行動に対するネガティブな情動を低減させるうえで重要であると考えられる。

2つめは、重症心身障害児・者が探索行動を行う際の姿勢の補助である。姿勢の安定は、重症心身障害児・者が刺激の探索を行う上で極めて重要であることが多くの研究によって指摘されている(例えば、進, 1996; 細測, 2012; 別所・山田・入江, 2016)。また、重症心身障害児の姿勢保持に関する検討や、探索行動を行いやすい姿勢に関する検討もいくつか行われている(進, 1993a; 進, 1993b; 藤田, 2010)。しかしながら、重症心身障害児・者自身が姿勢を安定させることが難しい場合、支援者が重症心身障害児・者の姿勢を支えることで探索行動を促すことも必要である。笹原・川住(2010)は、上述の事例について環境調整のほかに、対象者の姿勢補助についても報告している。笹原・川住(2010)は、対象者との係わりを継続していく中で、支援者が対象者と手を

つなぐと、つないでいる手を前方に伸ばしつつ歩みを進め、手の甲でブロック玩具に触れるような行動が見られたことを報告した。そして、支援者が対象者の手を支えているような状態においては、支援者が動きを誘導しなくとも、対象者に向かって手を伸ばすという行動が出現するようになったことも報告した。こうした探索行動の変容は、支援者が対象者の姿勢を補助したことによって、探索行動を行うための姿勢の安定性が保障されたことが背景にあると考えられる。不安定な姿勢は重症心身障害児・者に対して不安や緊張などネガティブな情動を喚起させる。そして、探索行動を行うことは姿勢のバランスをある程度崩すことを必要とする。そのため、支援者は探索行動を行う際に崩れる姿勢のバランスを補助することで、対象者のネガティブな情動を低減することが求められる。

3つめは、指令的コミュニケーションを使用する頻度を減らすことである。指令的コミュニケーションとは、刺激に到達する、もしくは目的を達成するために行われる指示として定義される(中村・岡澤・土谷, 2016)。この指令的コミュニケーションは、重症心身障害児・者の探索行動に対する緊張を増加させることが指摘されている。笹原・川住(2011a)は、Rett症候群者との係わりの当初において、探索行動の対象となるぬいぐるみを触れさせようとした際に、対象者は徐々に身体を固くして、緊張状態を示した。またこうした緊張状態が、対象者の探索行動の展開を妨げたことも示唆された。このような対象者の様子を踏まえ、ぬいぐるみを触れさせるような係わりを減らし、対象者と手をつなぐような係わりを行ったところ、対象者の探索行動が徐々に展開した様子が見られた。こうした様子から、重症心身障害児・者の自発的な意志に反して、探索行動をさせるような指令的なコミュニケーションを使用する頻度を減らすことによって、探索行動に対する緊張状態を低減させることが重要だと考えられる。

3 痰の吸引は口腔内、気管内にチューブを挿入することによって行われる。そのため、チューブに対して定位し、知覚的吟味を行う必要がある。

IV. まとめ

ここまで、重症心身障害児・者の探索行動を促す際に必要となる係わりについて、その中で重症心身障害児・者が探索行動に対して抱くポジティブな情動を促進する係わりと、探索行動に対して抱くネガティブな情動を低減する係わりの2つに焦点を当ててまとめた。その結果、ポジティブな情動を促進する係わりとして、重症心身障害児・者が興味関心を抱く刺激の見極め、反応性の高い刺激の使用、叙述的コミュニケーションの使用の3つが挙げられた。また、ネガティブな情動を低減する係わりとして、重症心身障害児・者の周囲における環境調整、重症心身障害児・者の姿勢の補助、指令的コミュニケーションの不使用の3つが挙げられた。これらの係わりの具体例をまとめ

たものをTable 1に示す。

ここまで、ポジティブな情動を促す係わりとネガティブな情動を低減させる係わりについて一つずつ述べたが、Table 1に示したそれぞれの係わりの具体例からわかるように、実際の重症心身障害児・者との係わりの場面において、支援者はポジティブな情動を促す係わりとネガティブな情動を低減させる係わりを一緒に行っていることもわかる。その理由は、重症心身障害児・者が探索行動を行う際に体験されうるポジティブな情動とネガティブな情動はどちらかの情動だけが喚起されるということがないためである。そのため、重症心身障害児・者と係わる支援者は、関わる対象者がどのような情動状態にあるのかを適切にアセスメントし、上述のポジティブな情動を促す係わり

Table 1 探索行動を促すための係わりに焦点を当てた事例研究の概要

著者(発表年)	対象者のプロフィール	探索の対象となる刺激	探索行動を促すための係わり
岡澤・川住(2005)	小頭症、重度精神発達遅滞、脊柱側弯、左眼瞼下垂のある16歳の女性	・スプーン ・食物	・対象者が指向する(注視する)食物をアセスメントし、その食物に対する探索行動を促す。 ・対象者の手の甲を下から軽く支え、食物が口元に届くまでの過程を支える。
笹原・川住(2009)	脳性まひ、てんかんのある25歳の男性。	・痰の吸引の際に必要なとなるチューブ	・痰の吸引の開始や終了を伝える声かけと、口元に手を軽く触れるなどの触覚系のサインを提示する。
笹原・川住(2010)	Rett症候群のある19歳の女性	・ぬいぐるみ ・ブロック玩具	・対象者がぬいぐるみに触れた際に「ふさふさ～」と声をかける。 ・対象者の接近に合わせてぬいぐるみを持ち上げる、ブロック玩具を組み立てて置く。 ・対象者の手をつなぐようにして対象者の身体を支える。
笹原・川住(2011 a)	Rett症候群のある4歳の女児	・ミュージックビーズチェーンスイッチ	・対象児が指向している玩具を見極める。 ・対象児が見やすい位置に玩具を移動させる。 ・対象児が手に持っている玩具を支える、対象児が手放した玩具を再度呈示する。 ・ミュージックビーズチェーンの音が鳴った際に、「手(足)で鳴らしたね」と声をかける。
笹原・川住(2011 b)	Rett症候群のある19歳の女性	・ブロック玩具	・対象者が関心を向けている玩具を見極める。 ・ブロック玩具を組み立てて置く。 ・対象者の手をつなぐようにして対象者の身体を支える。 ・対象者がブロック玩具から離れた場合、ブロック玩具に引き戻すような発言を行わない。 ・対象者がブロック玩具に触れた際に、「斜めになった」「(ブロック玩具が倒れるまで)もう少しだね」等の声かけをする。

とネガティブな情動を低減させる係わりを適切に行うことが必要になるだろう。

付 記

本論文の執筆にあたって、貴重な助言をいただきました宮城教育大学の野崎義和先生、また重症心身障害児・者との係わりの実践に関する資料を提供していただきました群馬大学の中村保和先生に感謝申し上げます。

本研究は山口県立大学研究創作活動助成「重症心身障害児・者における探索行動を引き出す教育的対応及び、探索行動を捉える指標に関する文献的検討」（教員養成対応型／研究代表者：永瀬 開）の助成を受けた。

引用文献

別所史子・山田晃子・入江安子.(2016). 重症心身障害児に対する姿勢のケア。－異なった職種による論文内容の検討から－. *小児保健研究*, 75, 390-397.

藤田紀昭. (2010). ムーブメント教育が重症心身障害者に及ぼす影響について. *同志社スポーツ健康科学*, 2, 1-13

平元 東.(2015). 重症心身障害児(者)の状態像の診断と評価. 岡田喜篤(監修), *新版重症心身障害療育マニュアル*. 東京：医歯薬出版, 34-41.

細瀬富夫.(2012). 重症心身障害児における姿勢・運動の諸問題：姿勢づくりの取り組み. *障害者問題研究*, 40, 18-25.

鹿取廣人.(2003). *ことばの発達と認知の心理学*. 東京：東京大学出版会

菊池紀彦・郷右近歩・室田義久・野口和人・平野幹夫.(2004). 壮年期重症心身障害者の食事場面における特異的操作の獲得. *保健福祉学研究*, 3, 1-11.

北原 侑・米山 均.(1995). 重症心身障害児・者の目的自発行動の誘発：簡単な操作による快刺激発生装置の使用にて. *リハビリテーション医学*, 32, 934.

川住隆一・南島 開・野崎義和.(2015). 重度・

重複障害児のコミュニケーション行動の形成に関する研究－言語的働きかけに対する応答行動の発言経過－. *東北大学大学院教育学研究科教育ネットワークセンター年報*, 15, 43-52.

北島善夫.(2006). 重症心身障害児のコミュニケーション指導の視点. *障害者問題研究*, 33, 283-290.

松葉佐正. (2015). 重症心身障害の発生頻度と発生原因. 岡田喜篤 (監修), *新版重症心身障害療育マニュアル*. 東京：医歯薬出版, 41-46.

松田 直.(2002). 重度・重複障害児に関する教育実践研究の現状と課題. *特殊教育学研究*, 40, 341-347.

三浦清邦・熊谷俊幸・鈴木淑子・大木隆史・松本昭子・宮崎修次・早川知恵美・孫田信一・山田裕一・若松延昭.(2005). MECP2遺伝子異常を伴うRett症候群の臨床症状について. *脳と発達*, 37, 39-45.

中村保和・岡澤慎一・土谷良巳. (2016). 共創コミュニケーションのパラダイム－体系と概念－. 土谷良巳 (監修), *先天盲ろうの子どもとの共創コミュニケーション－理論と実際－*, 13-34.

野崎義和・川住隆一.(2012). 最重度脳機能障害を有する超重症児の実態理解と働きかけの変遷－心拍数指標を手掛かりにして－. *特殊教育学研究*, 50, 105-114.

Nunnaly, J.C. & Lemond, L.C.(1973). Exploratory behavior and human development. *Advances in child development and behaviors*, 8, 59-109.

岡澤慎一・川住隆一.(2005). 重症心身障害者の食事行動の改変過程とその際の援助方略の検討. *東北大学大学院教育学研究科研究年報*, 54, 271-293.

大江啓賢・川住隆一.(2014). 重症心身障害児及び重度重複障害児に対する療育・教育支援に関する研究動向と課題. *山形大学紀要(教育科学)*, 16, 47-57.

笹原未来・川住隆一.(2007). 障害のある子どもの“接近行動”の滞りとその促進に関する諸課題. *東北大学大学院教育学研究科研究年報*, 55,

225-241.

笹原未来・川住隆一. (2009). 医療的ケア場面における重度・重複障害者の状況把握の促進過程. *特殊教育学研究*, 47, 231-243.

笹原未来・川住隆一. (2010). Rett症候群者における接近行動の展開過程. *東北大学大学院教育学研究科年報*, 59, 239-253.

笹原未来・川住隆一. (2011a). 手の常同運動が見られるRett症候群児の探索的操作行動の促進をめざした教育的対応の展開過程. *東北大学大学院教育学研究科研究年報*, 60, 331-343.

笹原未来・川住隆一. (2011b). Rett症候群者の探索的操作行動の促進に関する実践研究. *特殊教育学研究*, 49, 61-71.

進 一鷹. (1993a). 重度・重複障害児の操作行動の高次化と垂直位の姿勢. *熊本大学教育学部紀要*, *人文科学*, 42, 139-149.

進 一鷹. (1993b). 重症心身障害幼児の身体各部による操作活動と姿勢の調節. *特殊教育学研究*, 31, 35-40

進 一鷹. (1996). 重症心身障害児の姿勢と外界に関する理論的考察. *熊本大学教育実践研究*, 13, 49-59.

土谷良巳 (2016). 障害の重い子どもとの共同活動における共同性と相互性：行動体制間(相互)調整の観点からの考察. *上越教育大学特別支援教育実践センター紀要*, 22, 9-18.

鶴田奈美・岡澤慎一. (2015). 重度・重複障害児との教育的係わり合いに関する一考察：子どものイニシアチブを大切にしながら. *宇都宮大学教育学部教育実践紀要*, 1, 213-216.

山崎愛世. (1975). 触覚による図形認知と手による輪郭の追跡行動. *教育心理学研究*, 23, 180-187.

**A review of exploratory behavior in individuals with profound and multiple disabilities:
focused on support methods for inducing exploratory behavior**

**Kai NAGASE
Yukiko OISHI
Kumi FUJITA**

Exploratory behavior is important for individuals with profound and multiple disabilities. In this study, we reviewed support methods for inducing exploratory behavior. In this review, we pointed out that there are two methods of support to induce exploratory behavior and have pointed out two such methods. In particular, support methods are needed to increase positive emotion and decrease negative emotion towards exploratory behavior. Therefore, it is important for support providers to assess the emotional state of individuals with profound and multiple disabilities.

Keywords: profound and multiple disabilities, exploratory behavior, increase positive emotion, decrease negative emotion